

第59回日本小児保健協会学術集会 市民公開講座

虐待の連鎖を断ち切る支援とは一親子と向き合う我々に、求められていること、できること—

虐待する保護者や家族への支援

牧 真 吉 (名古屋市中央療育センター)

I. はじめに

保護者や家族を支援しようと思うと子ども虐待という理解はどうだろうか。少なくともひどいことをする親と思ってはつながることは難しい。始まりは強制的な介入からでもどこかからは足並みをそろえられるようになることが目標である。そう考えると子どもを育てることに失敗している親という理解が手助けするのに役立つのである。何とかその失敗をカバーできるように応援をするのである。もちろん失敗ということに対してすら、認められない親はいる。自分は完璧な親だと思わないとやっていけないほど傷ついている人で、人を信用することも自分を信用することもできなくなっている。ちょっとでも自分が傷つきそうなことは受け入れることができない。子育てを失敗していると思うなんてとんでもないと考えているだろう。こうした人とどのようにつき合っていくことができるだろうか考えてみたい。

II. どんな人たちか

子育てとは誰でも同じようにできることなのだろうか。ばらつきがあってもうまい人もいれば下手な人もいると考えるのが妥当である。時代とともに子育ての水準は上がってきて、底辺にいた人たちは時代と同じように変化することができず、子育ての平均だけが上がり、取り残されてしまった人々が虐待という言葉方をしていると考えられないだろうか。昔は虐待などと言われることもなく、「たいへんね」とか「よくやっているね」とか声をかけられていたのではないだろう

か(図1)。こうした心遣いをするという以前のおつきあいレベルの支え合いが、子育てにとってはどれほど有用であったか。今はこうしたちょっとした支えがなくなり、特に底辺にいる、人を信用することができない人たちは孤立することになってしまい、ますます子育てが難しくなっている。

また、このような子育てをすることが下手な親はここまでどのように育ってきたのだろうか。人を信用することのできない人とは、信用できる体験を親との間に繰り返すことができなかったかもしれない。乳幼児期に母から見捨てられ、その後も満たされる体験をしたことのないまま大人になってしまった人を想像してみよう。父が駆け落ちをして、母にも捨てられ、祖父母の許にも長くいられず、施設→親族→施設と渡り歩いた人は、中学生では非行を重ね、中卒年齢に達して社会に放り出されて、人が信用できないとしても、当然のことである。信用するよという話をするこ

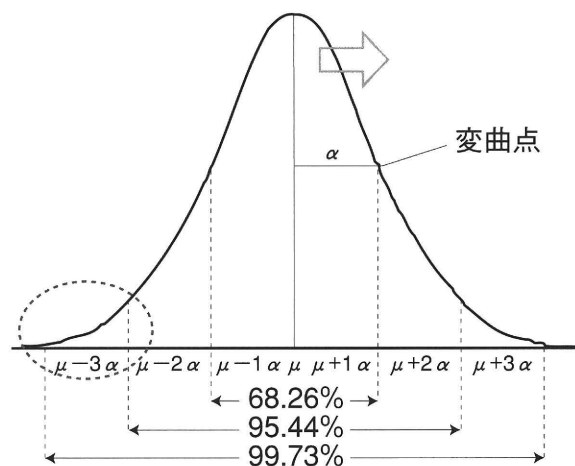


図1

はとでもできない。

人を信用できない人は子どもだって信用できず、「赤ちゃんが自分をバカにしている」と思ってしまう。赤ちゃんにバカにされるという意味が理解できるかどうかが第一歩である。そんな親がよくぞここまで子どもを育ててくれたというのが正直なところである。これまでにどんな人の助けを受けたのだろうか。きっと誰の助けもなく今まで、1か月足らずのことである場合にしても、よくぞここまで育ててくれた。このような理解の上にたって初めて支援は成立する。

Ⅲ. 子育ては社会で行うもの

わたしたちの考える子育ては平均的な家族から発想されている。前述のような親の元の家族についてはほとんど考えられていない。支えのない家族の支えを配慮しなければならないのにもかかわらず、今はプライバシーを守ることが大事にされる。しかし、プライバシーという考え方は、子育てという点からは害悪である。生まれてくる子どもがどれだけの人に知られているかが、その子の育ち、すなわち支え、に関わってくる。近隣の多くの人が、どんな子がどこに住んでいて、どのように育っているかを知っていることが子どもの支えである。学校もその子がどんな環境でどのように育ってきたかを知っていてこそ適切に関わることができる。子どもの問題行動は、子どものSOSであり、それを理解するためには、子どもの育ちと環境は必要な情報であるのに、プライバシーだから教えないというのは、この子は育てて貰わなくていいと言っているのに等しい。いろいろな人、社会が関わることによって初めて人は育つ。

この発想からは、生まれ落ちたときに子どもを包む社会を考えることができる。生まれた子どもと母に病院まで面会に来てくれる人が何人いるのか。これが極端に少ない親子についてはその時点から子どもを取り巻く社会を作り始めることがいいだろう。すなわち、生まれたところから母子を支援する人々を用意するという発想である。赤ちゃん部屋のお化け（フライバーグ）は他の大人がいてくれるだけで防ぐことができる。子どもを育てていくのは、親だけでなく社会であることをわたしたちは自覚すべきである。

Ⅳ. 人が信用できるようになるには

生まれたときがゼロだとすると、人を信用できない

人はマイナスに育ったとも考えることができる。そこからプラス方向に変えていくわけであるが、ゼロである赤ちゃんを育てるのでさえ簡単なことではない。となるとそんなに簡単に変わるものではないと覚悟を決めておいた方がいい。なおかつ、この領域は学ぶとか、訓練することができる領域ではない。体験を重ねることによって変化していきただけである。その体験をどのように生み出すことができるのか。最初の関わりは前述のように彼らを理解することから始まる。わかってもらえる体験をすることはとても大きな変化である。彼らは「ああしたらいい」、「それはだめ」という言葉はたくさんかけて貰っているが、「よくやってきた」という言葉かけはほとんど受けたことがない。自分を認めることができているところへの変化の始まりである。こうした声かけをしてくれる人が次々と現れたらどのように感じるのだろうか。これはかつて、「かわいい子だね」と赤ちゃんを抱いているお母さんに対して次々と色々な人が声をかけていた昔と似たような構造である。

子どもが信頼を育てるのと同じことであり、言葉の内容によって育つことはほとんどない。相手を認める言葉をどれだけかけて貰えたか、あるいは行動によって支えて貰うことができたかである。大人になってしまってからでも人を信用するためには全く同じである。体験こそが変化を起こすことができる。ベテルの家では、〇〇さんの応援会議という形で変えたいことを取り上げ、皆で話し合って最後は本人がどんなことをやってみるか決める。そのやり方では改善ができないことがわかっているも皆がではやってみることにしようと呼びかけて終わる。もちろん次の会議が開催されるわけで、うまくいってなくても誰も非難することなく、また話し合いをして対応策を検討する。そしてやはり当事者が対応策を決定する。こうしたことの繰り返しの中で、信頼感を形成している。ここで目標とされていることは、信頼感の形成と多くの人に助けられ、応援して貰っているというつながりを作ることである。結果は後からとてもゆっくりついてくるというのが実情である。

子育てについては、家族の対応が変わることをさしあたりの目標にしない方がいいだろう。多くの人に支えられて子どもが育つようになることが目標である。何も母だけが子どもを育てているわけではない。地域社会が子どもを育てるのであるから、その地域社会に

支えて貰えるようになることが目標である。そこで起きていることは子育てをしている人々が人を信用できるようになったことである。

V. 子育ては何重もの支えによって行われることである

従来、母の子どもへの対応を一番問題にしてきたが、母が安心して子どもに関われるような環境を作ることがとても重要である。母を支える家族はどのようにできているのだろうか。家族を支える地縁、血縁はどのようにあるのだろうか。地域社会は、そして国の文化や制度は家族や子育てを支える方向にあるのだろうか。少なくとも子どもの虐待という観点は子育てを支える発想ではない。子どもの育ちについてあれこれ言

うマスコミもとても家族を支えるという方向に向いているとは思えない。改善すべきことをあげつらうのは子育てに向かう家族を不安にさせている。制度としても子育ては家族で行うという視点で作られ、社会が子どもを育てる制度になっているとはとても言いがたい。子育てを支えるのは社会であるという自覚をもって関わろうとすると国の制度を変更するように声を上げることになる。

VI. しかし子どもが殺される事件は減っている

最後に警察庁の嬰兒殺（0歳児）の統計をグラフにしたものを載せておく（図2）。

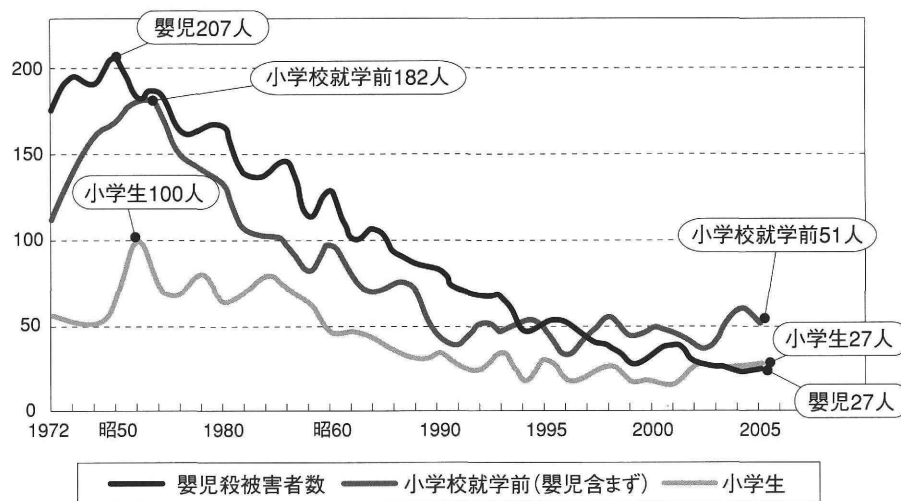


図2 嬰兒殺（赤ちゃん殺し）と幼児殺人被害者数
（少年犯罪データベース 管賀江留郎氏より）